

会話のフロアーにおける言語的／ 非言語的な参加態度の示し方

——初対面の日本語の母語話者／

非母語話者による4者間の会話の分析——

中 井 陽 子

キーワード

単独的フロアー・共同的フロアー・母語話者・非母語話者・参加態度の表出

1. はじめに

非母語話者が複数の母語話者の中で会話する際、言語的・非言語的な知識・能力の不足のため、会話に入り込んで、自分の興味・関心をうまく示せない時がある。中井（2006）では、Goodwin（1981）の参加態度の示し方の分析をもとに、会話において、参加者が言語的発話と非言語的行動（例：ささやき、笑い、飲食、テーブルをたたく、目線・手の動き・姿勢をかえる）を巧みに調整しながら、相手の注目を引いたり、似通った行動をしたりして、会話への参加態度と不参加態度を互いに示し合っていることについて探った。そして、頭や手、上体などの体の部分や視線を「会話の空間」の中に入れて参加態度を示し、反対に、体の部分や視線を「会話の空間」から外し、不参加態度を示していることが観察された。このような中井（2006）の分析をさらに発展させ、本研究では、参加者が出入りする「会話の空間」という概念を、会話のフロアーという概念に当てはめて

分析する。そして、その中で、参加者が言語的要素（例：あいづち、質問表現、繰り返し、評価的発話、共同発話など）と非言語的要素（例：うなずき、笑い、視線、手の動き、姿勢、ジュースを飲む行動など）を用いて、会話への参加態度をどのように示し合っているのかを分析し、非母語話者が積極的に会話に参加していくための手がかりの一つを探る。

2. 先行研究

2.1 参加態度の示し方

Goodwin (1981:96) は、ある参加者が視線や身体の向き等によって、他の参加者の方に向いているか向いていないかという観察を基に、参加態度の表出 (engagement displays) を分析している。例えば、他の参加者に対して、参加態度 (engagement) を示しているとは、共に会話に参加し、その瞬間の会話に対する注目を表わしていることだとしている (p.96, 125)。一方、不参加態度 (disengagement) を示しているとは、会話相手の方に向いておらず、話すなどの共同行為への不参加を示すものだという (p.101)。しかし、このような不参加態度の表出の間も、参加者達は、お互いの行動にかなり注意を払っているという。

2.2 フロアー

Edelsky (1981:209) によると、フロアーとは、「心理的な時間と空間において何が起きているかが認識されているもの」であり、「話題、または、機能（からかいや応答を引き出す等）、あるいは、この二つの混合、を含むもの」であるという。

Edelsky のフロアーの概念をさらに発展させた Hayashi (1991:8) では、単独的フロアー (single person floor) を「一人の参加者がフロアーを独占し、他の参加者がそのフロアーに協力している」状態だとし、共同的フロアー (collaborative floor) を「参加者すべてがその時に展開している会話に参加し、フロアーを共有している」状態であるとして分析している。そ

して、フロアー所持者は「現時点の話題で注目を浴びている者」であるとし、フロアー協力者はあいづちや、質問表現、評価的発話などのフロアー協力表示 (floor support) を用い、「フロアー所持者がフロアーを維持できるように、フロアー所持者と共に話題を展開させる者」(Hayashi 1991:3, 6) であるとしている。

Coates (1997) は、共同的フロアーは、関連した話題を共同で構築していく空間であるとし、複数の参加者からの補足発話、共同発話、同時発話、重複発話、繰り返し、言いさし、言葉探し発話、質問表現、コメント、あいづち、笑いなどが多く見られるという。そして、特に、あいづちや笑い、発話していなくても、フロアーに参加し続けているということを表示する重要な働きがあるとしている。

3. 会話データ分析

3.1 会話資料・参加者背景

20～30代の日本語母語話者2人(仮名：高志，八重)と日本語学習者(仮名：ロン，スー)による約45分間の初対面の日本語自由会話を録画撮りしたものを分析する。撮影当時，高志と八重は，米国某大学に留学している大学生で，知り合ってから1年半程度の親しい友人同士であった。ロンとスーは，同大学の3年生の日本語クラス(授業時間数500時間以上)に在籍しているアメリカ人学生であった。スーは，母親が日本語母語話者のため，日本語口頭能力は，ほとんど母語話者に近かったといえる。

3.2 会話におけるフロアーへの参加態度の表出の分析

本研究では，Edelsky (1981)，Hayashi (1991)，Coates (1997) の分析するフロアーという概念を用いて，会話参加者達の参加態度の表出について分析する。そして，会話のフロアーを，話題や機能，共有知識，注目，興味という観点から捉え，1) 会話の単独的フロアーと共同的フロアーという空間の中で，フロアー所持者とフロアー協力者がそれぞれどのように

言語的／非言語的に参加態度を示し、2) 母語話者と非母語話者ではどのように参加態度の示し方に違いがあるかを考察する。また、単独的フロアーと共同的フロアーの分類は、話し手と聞き手の間の相互行為的な会話の連続体の中にあるため、それぞれの分類を明確に区分するのは難しいと考える。よって、単独的フロアーと共同的フロアーを明確に区分して、数量的に分析することはせずに、より単独的フロアーと判断されるフロアーと、より共同的フロアーと判断されるフロアーの例をあげ、その中でどのようなことが起こっているのか、質的に詳細にみていくことにする。

3.2.1 ロンの単独的フロアー

会話例 (1) のように、非母語話者のロンは、皆の注目を引き、自分の単独的フロアーを形成している時は、積極的な会話への参加態度を示して会話を展開していることが観察された。図1に示したように、ここの単独的フロアーでは、フロアー所持者はロンであり、フロアー協力者はその他の参加者（高志・八重・スー）である。

会話例 (1) では、フロアー所持者のロンは、自分の持っている話題・情報である自分の高校時代の日本留学のことについて語り、他の参加者に視線を向けることによって、フロアーへの参加態度を示していた。フロアー協力者の3人は、あいづち（10 八重, 14 八重, 18 高志, 19 八重, 32 高志, 37 八重, 38 高志, 46 八重, 52 八重, 53 高志, 54 八重）、うなずき、繰り返し（2 高志, 3 スー, 5 高志, 6 八重, 12 八重, 23 高志, 24 スー、

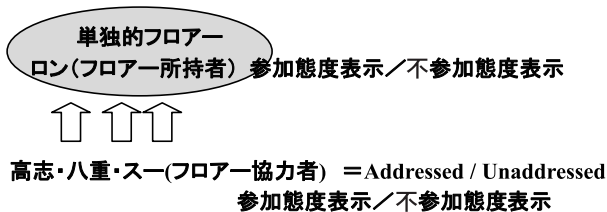


図1

44 八重), 質問表現 (6 八重, 9 高志, 15 高志, 20 八重, 34 八重), 評価的発話 (28 八重, 29 八重, 49 八重, 51 高志), 笑い (21 全員, 25 高志八重スー, 27 全員, 31 高志八重スー, 35 全員, 40 全員, 48 高志), 語彙の支援 (43 スー, 44 八重), 視線などのフロアー協力表示を用いて, フロアーへの参加態度を示していた。なお, ロンの単独的フロアーが見やすいように, ロンの発話部分を太字にした。

会話例 (1): ロンの高校時代の日本留学 (ロンの単独的フロアー)

(省略)

- 1 ロン: えっとー, 私は, えーと, せ, 三年前に, と, 一週間ぐらい, と,
留学しに行ったん, 行ってきたん。
- 2 高志: 一週間? 繰り返し確認
- 3 スー: 一週間? 繰り返し確認
- 4 ロン: い, 一年間。
- 5 高志: //あ一年間。 繰り返し確認
- 6 八重: あ一年間, //あれ, それ何かの大学か何かで? 繰り返し, 質問表現
- 7 ロン: プー, はい。
- 8 ロン: いえ, 高校だった。
- 9 高志: //あどこのどこで? 質問表現
- 10 八重: あー。 あいづち
- 11 ロン: とー, の愛知県の豊橋だ。
- 12 八重: あー, 豊橋, はいはいはい, 名古屋。 繰り返し
- 13 ロン: と, 名古屋の, と, 一時半南です。
- 14 八重: うん, うん。 あいづち
- 15 高志: 何, 何でまた, そーエキステンジのあれか何か
あったんですか? 質問表現
- 16 ロン: えーと, AFS のエキステンジでした。
- 17 ロン: ホストファミリーと, //一年, 住, 住みました。
- 18 高志: はー, //はー。 あいづち
- 19 八重: ふーん。 あいづち
- 20 八重: えーどうでした? 質問表現
- 21 全員: |笑い|

- 22 ロン：楽しかったけど...
- 23 高志：けど… 繰り返し
- 24 スー：けど… 繰り返し
- 25 高志八重スー：{笑い}
- 26 ロン：すごくいろんなことがあったから。
- 27 全員：{笑い}
- 28 八重：はい，想像つきます。 評価的発話
- 29 八重：いろいろ苦勞したんですね。 評価的発話
- 30 ロン：はい。
- 31 高志八重スー：{笑い}
- 32 高志：なるほど。 あいづち
- 33 八重：日本人社会。
- 34 八重：大変だったんですか？ 質問表現
- 35 全員：{笑い}
- 36 ロン：ちょっと，あー，ちょっと，あー，高校のことはすごく
珍しかったんですね。
- 37 八重：うんうん，そう思う。 あいづち
- 38 高志：あーなるほど。 あいづち
- 39 ロン：先生がすごく厳しくって，
- 40 全員：{笑い}
- 41 ロン：えっと，えっと，毎週月曜日は，と，ここの，と，ここの前で
- 42 ロン：何て言うの？
- 43 スー：あーわかる，わかる，朝礼。 語彙の支援
- 44 八重：朝礼。 語彙の支援の繰り返し
- 45 ロン：はい。
- 46 八重：うんうんうん。 あいづち
- 47 ロン：と，それで，先生が話して，それをしなさい，何々をしなさい
ということを，全然信，信じられなかった。
- 48 高志：{笑い}
- 49 八重：あーやっぱりアメリカ人ね。 評価的発話
- 50 ロン：{笑い} えー？
- 51 高志：あーカルチャーショックで。 評価的発話
- 52 八重：うん，そうだろうねー。 あいづち
- 53 高志：うん あいづち

3.2.2 高志とスーの共同的分フロー

会話例(2)では、高志とスーは、会計学の話題に共有知識と興味を持って話し、高志がスーに会計学を教えてくれるように依頼している。そして、二人は、同時に、前傾姿勢になったり、ささやきあったり、手を机に置いたりして(cf. 中井2006)、共同的分フローを形成していた。ここでは、高志とスーは、互いに直接話しかけられている受け手(addressed recipients)、つまり、「話し手が視覚的注目(例:視線)を持って話しかける者で、また、話し手が話す役割を次に取ることを期待する者」(Goffman 1981:133)であるといえる。それに対して、八重とロンは、話し手から直接的な働きかけや視線を向けられない受け手(unaddressed recipients)であるといえる。ここでの共同的分フローは、図2のようになっている。

八重とロンは、直接話しかけられていない受け手ではあるが、分フロー協力者として、会計学のクラスについての高志とスーの話をずっとモニターし続けていた。しかし、八重とロンの参加態度の表出の仕方は少し違っていた。八重は、視線(20行目、23行目、24行目、33行目、40行目)、うなずき、あいづち(21行目)、笑い(40行目)等の分フロー協力表示を所々にさしはさむことによって、高志とスーの共同的分フローへの参加態度を示し、また、ジュースを注いだり(24行目)、下を向いたり(24行目)

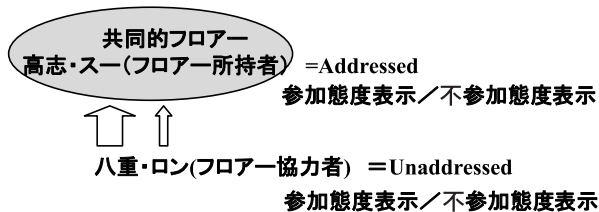


図2

して不参加態度を示して、フロアーに自由にすばやく出入りしていた。これは、八重が、今、フロアーの中で何が起きているのか、また、自分がどこでどのようにフロアーの中に参加できるのかを容易に推し量ることができたためではないかと考えられる。

これに対して、ロンは、高志とスーの共同的反答フロアーにどのように参加すればよいか戸惑いながら、高志やスーや八重をちらちら見たり（20行目、21行目、23行目、25行目、31行目、33行目、34行目、36行目、38行目、41行目）、下を向いたり（21行目、24行目、27行目、31行目、37行目、38行目）、苦笑いをしたり（31行目）して、少しぎこちない様子で、参加態度を示そうとしていた。これは、ロンが高志にフロアーへ参加させてもらえるタイミングを待っていたのではないかと考えられる。しかし、実際、高志は、その時、ロンではなく、スーにだけ興味を示して注目し、スーだけとの共同的反答フロアーを形成していた。このことから、非母語話者のロンには、フロアーの中で今起きていることを理解し、参加者としての自らの立場・役割を把握するための言語的、文化的な知識や技能が不足していたため、高志とスーの共同的反答フロアーに自由に参加・不参加ができなかったのではないかと考えられる。つまり、共同的反答フロアーに参加するためには、日本語の語彙力、文法力、聞き取り能力、発話力などの他に、フロアー参加が可能かどうかを瞬時に判断する能力なども必要であるものと思われる。

会話例 (2) : 会計学のクラス (高志とスーの共同的反答フロアー)

(省略)

20 スー：まだ会計学のクラスは、あの、始まってないので。

||

八重とロンがスーを見る。

21 八重：あ、そうですか。

||

ロンが八重を見て、下を向く。

22 スー：ええ。

高志が右手で机を叩き、両手を机に置く。

||

23 高志：じゃあ、カールソンの？

||

八重とロンが高志を見る。

24 スー：はい、あの、一応プリビジネス？

|| || ||

八重がスーを見る。ロンが下を向く。八重が下を向き、ジュースを注ぐ。

高志が前傾姿勢になる。

||

25 高志：＜WH あ、ほんとに？ WH＞

||

ロンが高志を見る。

スーが前傾姿勢になる。

||

26 スー：＜WH はい。WH＞

27 高志：＜WHほんとに？ WH＞

||

ロンが下を向く。

28 スー：＜WH はい。WH＞

29 高志：＜WH 同じなんですけど。WH＞

30 スー：|笑い|

31 高志：いや、本当に 冗談抜きで。

|| ||

ロンが高志の方に頭をかきあげる。ロンが下を向いて、苦笑いする。

32 スー：いや、ちょっ、そうですか。

高志が両手で机を3回叩いて、机に置く。

|| || ||

33 高志：ちょっと今アカウンティングほんと困ってる。

|| ||

スーとロンが高志を見る。 八重が高志を見る。

スーが左手を机に置く。

||

34 スー：あ、私も本当に困ってます。

||

ロンがスーを見る。

35 スー：//どうしようかなと。

36 高志：え、な、今どれをどれを取ってるん？

//どのクラス。||

ロンが高志を見る。

37 スー：いや今は取ってないんです、実は。|笑い|

||

ロンが下を向く。

38 高志：あっ取ってない。// |笑い|

||

||

ロンが高志を見る。

ロンが下を向く。

39 スー： |笑い|

八重がスーを見る。

||

40 八重：|笑い|

41 高志：そうかあ。

||

ロンが高志を見る。

42 スー：ええ。

3.2.3 高志の単独的フロアー

会話例(3)は、アメリカ人と日本人の4人で会話する際に日本語と英語のどちらを用いたらよいか迷ってしまうということを説明する高志の単独的フロアーであり、八重とスーとロンがフロアー協力者である。この単独的フロアーは、図3のように示される。

八重とスーは、2行目と3行目において、ほとんど同時に、うなずきながら「あーあー。」というあいづちを用い、7行目で八重が笑いながら

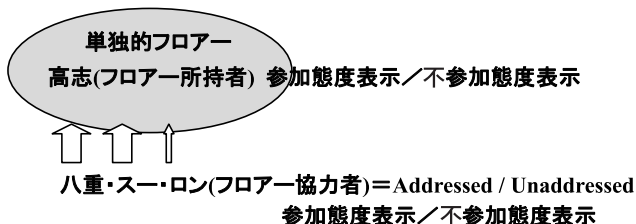


図 3

「変になる。」と言ったすぐ後に、8行目でスーもまた笑いながら「変になる。」と繰り返して、二人同時に前傾姿勢で笑っている。この7,8行目の二人の発話は、6行目の高志の発話構成に協力する共同発話になっている。このように、八重とスーは、似通った言語的・非言語的行動で高志の単独的フロアーに積極的に協力し、フロアーへの参加態度を示している。しかし、この時、ロンは、高志の発話を理解していたにもかかわらず、八重とスーのあいづちに少し遅れて4行目で「あー。」と苦笑いし、6行目と10行目でうなずいているだけであった。このように、ロンは、他の参加者に比べ、フロアー協力者として、あいづちや笑い、繰り返し、共同発話等を用いて、他の参加者の単独的フロアーを支持し、積極的な参加態度を十分示していなかったようであるといえる。

会話例 (3) : 日本語と英語で話すこと (高志の単独的フロアー)

(省略)

1 高志：いや、英語使っていいのかな、日本語使っていいのかなあと思って。

HHHH

2 八重：あー//あー。

あいづち

HHH

3 スー： あーあー。

あいづち・同時発話

4 ロン：あー。|苦笑い|

あいづち

H H

5 スー：そうですね。

あいづち

6 高志：ちょっとね、たまに、あの、無理に日本語でしゃべろうとすると、

||

ロンが微笑んでうなづく。

7 八重：{笑い} 変になる。{笑い}

共同発話

スーと八重が前傾姿勢になる。

||

8 スー：{笑い} 変になる。{笑い}HH

共同発話・繰り返し

9 高志：わけの分か//らない言葉になる。

10 スー： らない。{笑い}

共同発話

||

ロンがうなづいて、下を向く。

このように、ロンは、他の参加者に比べ、あいづち、コメント、質問、繰り返し、共同発話などのフロアー協力表示をあまり用いていなかった。このようなロンの参加の仕方の違いは、いくらロンが熱心に他の参加者の話を聞いているということを示そうとしていても、他の参加者たちにとって、ロンは自分たちと違うという思いを抱かせていたようである。それに対して、スーのフロアー協力表示の用い方は、タイミングや頻度の点でも八重の用い方と非常に近かったため、高志と八重にとってスーは自分達と同じだという安心感を抱かせていたようである。

Edelsky (1981) では、女性より男性の方が、単独的フロアーを所持して語り、共同的フロアーではあまり話さない傾向があるとしている。このことは、本研究の会話にも当てはまり、高志とロンが八重とスーよりも単独的フロアーを持つ傾向が強かった。しかし、高志とロンの違う点は、高志が八重とスーと同様に、共同的フロアーを他の参加者と構成して、積極的に参加態度を示したり、他の参加者の単独的フロアーに積極的に協力したりしていたのに対し、ロンにはあまりそのような傾向が見られなかった点である。つまり、非母語話者のロンにとって、日本語の会話においては、自身の単独的フロアーは比較的容易に展開できるのに対して、他者の単独的フロアーや共同的フロアーへフロアー協力表示を用いて参加態度を示し

ていくのは、困難であったのではないと思われる。

3.2.4 高志・八重+スー・ロンの共同的分アワー

会話例 (4) の前に、八重と高志が英語の非母語話者としてアメリカの大学で勉強している際のクラスの準備の大変さについて話し、八重と高志の共同的分アワーを形成していた。そして、八重が、1, 2, 3, 6行目で、スーとロンに対して、日本語を学習する上で、聞き取りから先に伸びなかったかと質問表現で、同意を求めている。これにより、スーとロンが複数のうなずきと応答表現と共に、八重に同意する発話をし、分アワーへの参加態度を強く示している。ここで、八重は、英語を学ぶ八重と高志と、日本語を学ぶスーとロンを同じ外国語学習者として共有体験があるものと考え、スーとロンに対して、同意要求の質問表現で分アワーに参加することを促し、4人全員の共同的分アワーを形成することに成功している。この共同的分アワーは、図4のようになる。



図4

会話例 (4) :外国語の勉強の苦勞 (高志・八重+スー・ロンの共同的分アワー)
(省略)

八重がスーとロンを交互に指差す。

||

- | | |
|-----------------------|------|
| 1 八重：でも、聞き取りから伸びませんか？ | 質問表現 |
| 2 八重：そうじゃなかったですか？ | 質問表現 |

||

ロンがうなずきながら、スーを見る。

- | | |
|--------------------------------|------|
| 3 八重：聞き取りから一番//最初に簡単じゃなかったですか？ | 質問表現 |
|--------------------------------|------|

	H H HH	
4	ロン： はい、はい、そう思う。	応答表現
5	ロン：うん。	応答表現
6	八重：そうでもない？	質問表現
	HHH H H	
7	スー：うーん、そうですね。たぶん。うん、うん。	応答表現
	H	
8	ロン：はい。	応答表現
	HH	
9	スー：聞き取りは。	
10	ロン：私、私にとっても、違、違う、私の経験は、	
	H	
11	八重：うん。	
12	ロン：そ、そ、そんなことで。はい	
	H H	
13	八重：うん、うん、私もそう思う。	
14	八重：喋るのが一番//難しい。	
15	スー： 表せにくいから、考え方が。	
	H H	
16	八重：あー、あー。	
17	スー：考え方というか、	
18	八重：そ、そ、そ。	
19	スー：言いたいことが。	

4. まとめと今後の課題

本研究で分析した会話資料では、1) 参加者は似たような言語的／非言語的要素を互いに同時に用いるなどして、共同的反応を形成したり、単独的反応に協力したりしている、2) 単独的反応に対して、あいつち、うなずき、繰り返し、評価的発言、質問表現、共同発言、笑い、視線、姿勢の変化などの反応協力表示を用いて、反応への参加態度を示しながら反応に協力している、3) 直接語りかけられていない

参加者も、進行中の会話をモニターし、会話への参加態度と不参加態度を示している、ということが観察された。また、非母語話者のロンについては、1) 皆の注目を引き、自分の単独的フロアーを形成している時は、積極的な会話への参加態度を示して会話を展開させられる、2) 他の参加者による単独的フロアーや共同的フロアーに対しては、うまく参加態度を示せず、どのように参加してよいのか戸惑っている、3) 他の参加者の手助けで、共同的フロアーへの参加がしやすくなる、という傾向が見られた。

Hayashi (1991:7) は、「参加者の社会的、文化的な背景知識がフロアー構成に大きな影響を与えており、フロアーは、権力、結束性、協力、摩擦、競争などの社会的な考慮を反映している」とし、また、「話し手と聞き手の互いの同情的・感情的な関わりあい」もフロアーでの相互作用に大きな影響を与えているとしている。このような Hayashi (1991) の社会的変数の概念は、日本語母語話者同士と母語話者と非母語話者との相互行為を比較するのに大変重要である。日本語母語話者のフロアーと非母語話者のそれとは、社会文化的な背景の違いから、異なる形態を取ると考えられる。感情的な関わりあいもまた、参加者間のフロアー構築に影響を与えると思われる。つまり、同じ意見や知識、感情をどの程度共有しているかで、単独的フロアーを形成するのか、共同的フロアーに参加するのか、フロアー協力表示をどの程度示すのかという参加態度の表示の仕方に影響を与えるであろうからである。

今回分析した結果をいかに日本語教育へ応用できるかについては、次のようなことが考えられる。まず、日本語の授業に日本語母語話者のボランティアなどを呼び、学習者とともに自由会話をしてもらおう。その際、まず、学習者が自分の情報を語るという単独的フロアーを持つようなタスクを設定し、ボランティアには、あいづちや質問表現、確認、語彙の支援、繰り返し、評価的発話などのフロアー協力表示を用いて、学習者の単独的フロアーを積極的に支持してもらおうように促す。また、次に、学習者には、ボランティアがどのようなフロアー協力表示を用いていたか分析させなが

ら、フロアー協力表示についての知識を事前に与え、自分でもしっかり使えるように、ドリル練習をする。その後のタスクとして、反対に、ボランティアが自分の情報を語るような単独的フロアーを持つような会話を設定し、今度は、学習者がボランティアの単独的フロアーを積極的に支持できるように、意識的に練習させる。そして、最後に、学習者とボランティアが共通して情報を持って話題を展開させていくような共同的フロアーが持てるようなタスクを設定し、お互いにフロアー協力表示を用いて、積極的にフロアーに参加していけるように練習させる。さらに、このような自由会話の参加人数も、1対1からはじめ、徐々に3～5人程度の複数の会話にしていくのがよい。会話の参加人数が増えれば、会話例(2)、(3)でみたように、単独的フロアーや共同的フロアーの組み合わせが複雑になるため、よりフロアー参加の難易度が上がるといえる。また、このような学習者とボランティアによる自由会話を録画撮りし、後日、学習者に自分自身のフロアーへの参加の仕方を客観的に分析させ、次回自由会話への参考にさせるのもよいと考えられる。

今後の課題として、Hayashi (1991) のいう社会的、文化的な背景知識の観点と感情的な関わりあいの観点から、母語話者と非母語話者によるフロアーへの参加態度の示し方の違いを明らかにしたい。そして、より効果的な会話への参加の仕方の構造を提示し、さらなる日本語教育への応用の考察と教育実践を行っていきたいと思う。

文字化表記方法：ザトラウスキー(1993)を参考に以下のような方法で行った。

。	下降のイントネーションで文が終了することを示す。
，	ごく短い沈黙、あるいはさらに文が続く可能性がある場合の「名詞句、副詞、従属節」等の後に記す。
？	疑問符ではなく、上昇のイントネーションを示す。
—	「—」の前の音節が長く延ばされていることを示す。
//	同時発話
{ }	笑い等の非言語行動

その他

	話し手自身／話し手と同じグループの参加者の非言語行動は、発話の上に記した。話し手ではない参加者の非言語行動は、話し手の発話の下に記した。
H	うなずき
< WH WH >	ささやき声で発話されたもの

本研究は、16年度早稲田大学特定課題研究助成費「日本語母語話者／非母語話者間の会話における言語的／非言語的な参加態度の示し方」の研究成果の一部であり、第15回社会言語科学会研究大会で発表したものに加筆修正したものである。

参考文献

- Coates, Jennifer. 1997. The construction of a collaborative floor in women's friendly talk. *Conversation: Cognitive Communicative and social perspectives*, ed. by T. Givón, 55-89. Amsterdam: Benjamins.
- Edelsky, Carole. 1981. Chapter 8: Who's got the floor? Gender and conversational interaction, ed. by Deborah Tannen, 189-227. Oxford: Oxford Studies in Sociolinguistics.
- Goffman, Erving. 1981. *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Goodwin, Charles. 1981. *Conversational organization: Interaction between speakers and hearers*. New York: Academic Press.
- Hayashi, Reiko. 1991. Floor structure of English and Japanese conversation. *Journal of Pragmatics* 16: 1-30.
- 中井陽子 (2005) 「会話のフロアにおける言語的／非言語的な参加態度の示し方—初対面の日本語の母語話者／非母語話者による4者間の会話の分析」『第15回社会言語科学会研究大会予稿集』 pp. 214-217 社会言語科学会
- (2006) 「日本語の会話における言語的／非言語的な参加態度の示し方—初対面の母語話者／非母語話者による4者間の会話の分析」『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』 pp. 79-98 早稲田大学日本語教育研究センター
- ザトラウスキー, ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』 くろしお出版